

黄色がけが「言葉」です。緑がけが、「出来事」としてくりかえされている部分。

### 「白雪姫」

昔むかし、ある冬のさなかのこと、雪が鳥の羽のように空からふついているとき、女王が、黒い黒檀の窓わくのある窓辺にすわって、縫い物をしていました。縫い物をしながら雪のほうを見たとき、針を指にさして、血が三滴雪の上に落ちました。まっ白い雪の中の赤い血がとても美しかったので、女王は、

「この雪のように白く、この血のように赤く、この窓わくのように黒い髪の子どもがいたらいいのに」と思いました。

それからまもなく、女王は女の子を生みました。その子は雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い髪をしていたので、白雪姫と名づけられました。

『語るためのグリム童話3』小澤俊夫監訳／福音館書店

### 「まほうの馬」

やがて、まほうの馬が、川から浮かびあがってきていいました。

「ディフをやっつけました。あなたはこれで永遠にすくわれました。さあ、つぎは、私を殺してください。私の首はそばにすてて、四本の足は、四つの方角にむけて立ててください。それから、お腹の中のぞうもつを取りだして捨て、ろっ骨のなかに子どもたちといっしょにかがみこんでください」

おきさきはびっくりしてさげびました。

「どうしてそんなことができるでしょう。わたしをすくってくれたあなたを殺すなんて」けれども、まほうの馬はききません。

「そうしてくれなければ、だめなのです。どうか、わたしのいうとおりにしてください」まほうの馬がくり返したのむので、とうとうおきさきは、まほうの馬を殺しました。そして、首をそばにすてると、四本の足を四つの方角にむけて立て、ぞうもつを取りだして、ろっ骨の中に、ふたりの子どもといっしょにかがみこみました。

そのとたん、四本の足は、エメラルド色の葉っぱを上げさせた、四本の黄金のポプラの木にかかりました。ぞうもつからは、村や牧草地ができました。そして、ろっ骨は、黄金のお城になりました。首は、銀色にきらきら光る小川になりました。

原話：『世界のメルヘン図書館5』 再話：村上郁

## 「洪水」

「洪水だって。いつくるの」と、男の子はききました。

「監獄の門の前にある、ふたつの石の獅子の目が赤くなったら、洪水がやって来るしるしだよ」

男の子はすぐに監獄の前の石の獅子を見に走っていきました。けれど、その目はまだ赤くなっていませんでした。おばあさんは男の子に、

「木で小さな船を作って、はこに入れてしまっておきなさい」といいました。男の子はいわれたとおりにしました。

それからというもの、男の子は毎日、監獄の前に行って石の獅子の目が赤くなっていないか調べました。

ある日のこと、男の子がニワトリ売りの前を通りかかると、にわとり売りが、

「おまえさん。どうして、毎日毎日、石の獅子のところへ通うんだい」とききました。男の子は、

「あの獅子の目が赤くなったら、洪水がやって来るんだよ」と答えました。

ニワトリ売りは大笑いして、本気にしませんでした。そして、つぎの朝早く、石の獅子の両方の目に、ニワトリの血をぬりつけておきました。しばらくして男の子がやってきました。そして、石の獅子の両目が赤くなっているのを見ると、大急ぎで家にかげもどって知らせました。おばあさんは、

「さあ、庭にうめてあるつぼを急いでほりだしておいで。それから、木で作った船をはこからだしておいで」といいました。

男の子とおかあさんが庭のつぼをほりだしてみると、なんと、その中に、美しい真珠がぎっしりつまっているではありませんか。そして、小さな木の船は、はこから出したとたん、またたくまに大きくなって、ほんとうの船になりました。

おばあさんはいいました。

「ふたりとも、そのつぼをもって船に乗りなさい。じきに洪水が来るから。動物たちが流されてきたら、みんな船に助けあげてやるんだよ。けれど、黒いかみをした人間は、けっして助けるんじゃないよ」

男の子とおかあさんは、つぼをかかえて船に乗りこみました。すると、おばあさんは、あつというまにすがたを消しました。

ちようどそのとき、にわか雨がふりはじめました。雨はしだいにはげしくなり、天から地面にたたきつけるように、すさまじいきおいでふってきます。まるで滝のようです。あたりはみるみるうちに水につかってしまいました。